

二〇二二年五月二日

推敲に倦みていつしか三尺寝	素 秀
柿若葉雨の上がりし散歩道	こすもす
川下る棹の捌きや新樹光	かかし
木漏れ日と鳥語に和む夏館	たか子
鳥語降り注ぎやまずよ夏木立	よう子
夏木立歩みをとめて鳥語聴く	かかし
苔庭に影打ち重ね若楓	わかば
葛餅や宇治十帖の和歌の皿	なつき
老いてなほ夢をつながむ更衣	宏 虎
庭にでて月命日の薔薇を剪る	なつき
噴煙を呑み込まんとす夏の雲	愛 正
亡き夫の郷降りたてば若葉風	む べ
神苑の杜明るうす若葉雨	愛 正

新茶いれ昔馴染みの輪の和む	たか子
悉くヒマラヤ杉や木下闇	はく子
南禅寺見渡すかぎり青楓	よう子
祠へと続く小道は竹の秋	わかば
鳥語降る下闇深く義士の墓	ぼんこ
月涼し闇より黒き喪服かな	む べ
水際に松風通ふ植田かな	素 秀

毎週句会秀句・みのる選・二〇二二年五月二日